

病虫害発生予察指導情報

(ナシ・シンクイムシ類 No.1)

令和8年7月24日
鳥取県病虫害防除所

1. 情報の内容

7月中旬現在、性フェロモントラップの誘殺数は平年並～平年に比べてやや多くなっているが、前世代は平年と比較して多く推移した地点もみられた。今後、シンクイムシ類の発生密度が増加する時期を迎えるため、防除の徹底が必要である。

2. 情報の根拠

- (1) 7月中旬現在、シンクイムシ類の誘殺数は平年並～平年に比べてやや多くなっている。
- (2) 県予察ほ場（園芸試験場、無袋・殺虫剤無散布、‘ゴールド二十世紀’）では、7月中旬頃から、モモシンクイガ越冬世代による被害が見られている（図）。
- (3) 向こう1か月の気象予報（7月23日広島地方気象台発表）は、本種の発生に助長的である。今後、シンクイムシ類の発生量が増加する時期を迎えるため、発生密度の高い園や例年被害が多い園では、防除の徹底が必要である。

3. 防除上注意すべき事項

- (1) 二十世紀、新甘泉などでは、シベルメトリン水和剤（イカヅチWDG 1，500倍液又はアグロスリン水和剤2，000倍液）、テルスターフロアブル3，000倍液などを使用し、収穫前の防除を徹底する。
- (2) 晩生品種（新高、新興、王秋他）は、8月中下旬～9月中旬頃が重要な防除時期となるため、シベルメトリン水和剤（イカヅチWDG 1，500倍液又はアグロスリン水和剤2，000倍液）、テルスターフロアブル3，000倍液、サムコルフロアブル10の5，000倍液、フェニックスフロアブル4，000倍液などを使用し、定期的に防除を行う。
- (3) 園内のクリーン作業を徹底する。授粉樹の摘果、裸梨、被害果の徹底処分など、シンクイムシ類の発生源は早急に除去する。



カメムシ類による被害果に似るが（中）、食入（左上）及び脱出孔（左下）が確認できる。

また、凹み部分の果皮下はコルク状（カメムシ類による被害の特徴）ではなく、モモシンクイガ幼虫が穿孔した様子（右上）が観察できる。

写真 モモシンクイガ越冬世代による果実被害